

よこはま動物園における傷病鳥獣保護の 10 年

財団法人横浜市緑の協会 動物園部 近江谷知子

横浜市立よこはま動物園（通称ズーラシア）は「生命との共生・自然との調和」をメインテーマに、日本で初めて動物の生息地の環境を再現した展示様式を取り入れ、平成 11 年 4 月に開園した。現在までに様々な希少種の飼育と繁殖の成果をあげている。またその一方で、神奈川県内で保護された野生傷病鳥獣の受け入れも行ってきた。この活動は、神奈川県の野生動物保護事業の一環として県からの委託を受けて行っているもので、ズーラシアの他に神奈川県自然環境保全センター、横浜市立野毛山動物園ならびに金沢動物園、川崎市立夢見ヶ崎動物公園でも同様に受け入れを行っている。ズーラシアへは主に旭区近隣の地域で保護された動物が持ち込まれており、平成 11 年から平成 20 年までの間で、鳥類 1699 羽、哺乳類 241 頭の計 1940 件の保護を受け入れてきた。

保護される動物種は鳥類ではスズメ、キジバト、ヒヨドリ、メジロ、ツバメ、哺乳類ではホンダタヌキ、ハクビシン、アブラコウモリといった身近な動物たちがほとんどである。また、過去にはオオタカ、コアホウドリ、コアジサシ、シロハラミズナギドリ、ニホンカモシカといった希少種も保護されている。

ズーラシアでは受け入れられた保護動物の野生復帰を目指し治療・リハビリを行っているが、残念ながら野生復帰困難と判断された動物については、教育普及活動の中で生きた教材として活用している。こういった傷病鳥は、展示やガイド・ワークショップを介して来園者の方々に間近で見て触れてもらうことを通して、動物に対する興味を高める一助となっている。

動物園は希少動物の飼育繁殖を担うと同時に、教育施設としての社会的役割がある。傷病鳥獣として動物園にやってくる動物たちは、私達に人と野生動物との関係のあり方、身近な自然の大切さを教えてくれる。だからこそ自然保護や環境教育への理解を深めるための手段として、動物園における傷病鳥獣保護活動は重要な役割を果たしていると言えるであろう。

本発表では、これまでの 10 年間でズーラシアが取り組んできた傷病鳥獣保護事業について紹介する。